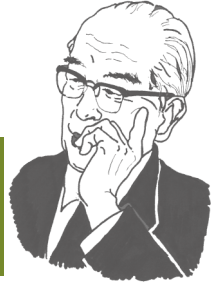


# 岡崎嘉平太記念館

## だより



Vol.20

### 薫陶わが人生・岡崎嘉平太



精義塾の先輩たちと懇親会(前列右から3人目嘉平太氏・大正9年) ※精義塾は、岡山県に縁のある学生のための寮

嘉平太氏は、一九一六(大正五年)に上京し第一高等学校へ入学、一九一九(大正八)年東京帝国大学へ進学しており『精義塾』に三年間在寮した。この塾は、岡山県出身の多くの協力者により組織された維持会から援助を受けた歴史をもつ。出身者に、仁科芳雄、守屋学治らもいる。嘉平太氏が大学2年生の頃、維持金が目標額に達したのを機に、維持会を解散し、金を塾の管理に移す検討がされた。そして、維持会員各位にその了承を得ることとなり、嘉平太氏は塾発祥の礎を築いた先輩 池田経三郎氏への伝達役を委ねられた。嘉平太氏は伺いを三度たてたが、取り付く島もなく、嘉平太氏が卒業の翌年に池田氏は亡くなられてしまった。

諭された教訓

：池田先生の真意は、「塾の維持会というものをやめてお金の残高(維持金)だけを塾がもらっているのか。それがどういふことを意味するのかを君はほんとうに知っているのか。そのことがいいのか、悪いのかを君は判断してきたのか」と私に質されたのだというところが、後になって解ったしだいである。池田先生は、前から、精義塾のようないいことに対しては外から常に応援すべきであり、したがって維持会をやめる必要はない、という意見だった。だから、東京の維持会のほうの金が集まったから残高を塾に渡せばいいという考えは根本的に間違っている。そんな考えではだめだ、と強く反発されたそうである。(中略)精義塾にいる者が、その問題の内容を十分知って、維持会の金をもらうのがいいのか、維持会は維持会としておいておくのがいいのか、その判断もしないで郵便屋のようなことをするのはいけない。(中略)どんなことでも文字どおりの伝達機関になつてはだめだ、自分自身で理解しなければどんな問題でも取り継いではいけない。取り継ぐ以上は賛否はともかく、内容は理解しておかなければいけない、と考えるようになった。それも池田先生が、簡単に一回で「この点はどうだ、こういうことを考えたか」と聞いてくださったのであれば、これほど身にしてみてもおぼえなかつたと思う。(中略)この体験から、私は、何よりもまずものの本質をつかまなければいけない、と考えるようになった。議論をする場合でも、いまの議論の本質は何かということになるべく早くつかんで、その本質に合わないことについてはあまり議論せず、本質に合うことについて話を進めるようにする。自分の仕事についても、その本質―要点と言ってもよいのだが―は何かということができるだけ早くつかんで、それを達成するように努力する。(中略)本質に合わない間違つた方向に飛び込んでいくと、むだ骨を折ることが多いし、なかなか立ち直れない。こう思っているが、それは池田先生から受けた非常にありがたい教訓による。そして今がある。(岡崎嘉平太著『財界人の昭和史②終りなき日中の旅』(株原書房一九八四年発行))

# 秋の特別企画展 一書にこめた嘉平太からのメッセージ

## 第3回岡崎嘉平太遺墨展の開催 平成25年9月22日(日)ー12月27日[金]

### 程永華駐日中国大使御夫妻来館



中央が程永華氏、右端から汪婉氏、  
岡崎眞氏、山本吉備中央町町長、  
神原館長 11月28日(木)

嘉平太氏は、人から頼まれれば、その人物に合う言葉を選び、揮毫し贈っていました。

時子夫人は、氏が持病の腰痛をこらえながら真摯に書く様子を著書に残しています。

また、使い込まれた書道具の様子からは、氏の揮毫は日常的でありながら、極めて大切に行われていたことが感じられます。

氏の用いた言葉は、豊富な人生経験から得た諦観、品性など内面的な奥深さが感じられ、だからこそいまを生きる私たちの胸に響くのだと思いました。

あわせて展示した中国の要人や友人から氏に贈られた書には、日中友好に懸ける願いを感じました。

在徳不在險

長野士郎学兄囀 岡崎嘉平太書

在徳不在險

長野士郎学兄囀 岡崎嘉平太書

長野洋子氏寄贈

国を治める根本は徳にある。即ち君主自ら徳を高め、有徳の賢人を登用し、人民を有徳の人に育成することにある。国境の要害を堅固にすることはない。この語は、  
中国戦国時代の呉起が齊の王を戒めたもの(「史記」巻六五「呉起伝」)。

推察するに、嘉平太氏は、岡山県知事であった長野士郎氏の依頼に応じて贈る言葉として、県政にもこれを根本に据えられるようにと、進められたのではないだろうか。二十歳年少である相手に学問上の先輩・畏友を意味する「学兄」を用いていることも味わい深い。

[廣常人世氏解説]

### 関連行事



岡山朝日高校書道部の生徒たちによる書道パフォーマンスの様子

公募展「書くこと、みることを通じて、嘉平太さんの心を感じよう」の様子。吉備中央町や総社市在住の方、岡山朝日高校の生徒から出品がありました。

# 岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える

## 第12回講演会の開催

平成25年11月10日(日)

混迷する日中関係のなか相互理解や発展に向けて積極的に取り組んでおられる横枕光則氏と清水勇佑氏を講師に迎えました。二方のお話から“多様性を理解する、世界に眼を向けて信念を持ち行動することが平和な未来を創る”というメッセージが感じられました。

横枕氏は、「一企業人として、一市民として」と題して講演されました。横枕氏は、北京・松下彩色顕像管有限公司(以下、BMCCと記す。)で、2002～同9年まで中国責任者を務められました。BMCCが日中合弁の模範企業と称された故由や、新種の感染症SARS騒動当時の危機管理など具体的な活動が伺えました。

BMCCでのブラウン管製造事業を終息し、帰国した横枕氏は、環境本部への異動を望みました。その理由を「中国の環境問題は、世界の問題。やがて13億の中国民が米国や日本と同じ水準の文明生活を行うようになり、後発開発途上国も中国をモデルに続く。今後は、中国と環境問題に取り組む覚悟。」と話されました。

清水氏は、東京大学の学生で『京論壇(きょうろんだん)』2013年日本側代表で、演題は「大学生からみた日中友好」。京論壇は、2005年の日中関係の急激な混迷をきっかけに「相互不信の解消・相互理解の促進」を目的に北京大学と東京大学の学生により成された討論団体です。半年をかけ事前準備、その後2週間の共同生活で、ひたすら対等な議論を重ね、互いに国情や価値感の違いを知り、社会発信する活動を真摯に続けています。若人がこの活動を通じ、両国にとって唯一の正解はないことを知り、互いに信頼できる友人を得た経験は、貴重なことだと思いました。



清水勇佑氏(中央)、横枕光則夫妻(左側)、鈴木良一氏(右端)

清水さんに  
一問一答

- 1 尊敬する人:小説家で中島敦
- 2 中学生時代最も頑張ったこと:部活のテニスを最も頑張りました。自宅から学校まで一時間かかり、朝練などは大変でした。
- 3 頑張れた理由:テニスは中学校に入ってから始めたため最初はとても下手でした。負けず嫌いな性格で、友達と競い合い頑張ることができたように思います。
- 4 東京大学法学部へ進んだ理由:「法学部」の志望は、自分をとりまいている社会の根本をなす仕組み、枠組みに漠然とした関心があったからです。「東大」に関しては、高校時代には特に理由が無く行きたいと思っていたのが正直なところですが、少なくとも、ずっと努力を重ねてきた人が集まる環境というところに対する興味はありました。
- 5 大学生時代の成果とその要因:京論壇という学生団体で代表を務め、東大と北京大学の学生が議論を行うプラットフォームを作りました。顧問教授や協賛して下さっている方々から助言や批判などのサポートを得られたことがとても重要でした。
- 6 最近読んだ本:中島敦が好きで、最近は最も有名な『山月記』を読み直しました。
- 7 その本で学んだこと:まさにこれが山月記の主題ですが、人に負けることを恐れて自分の殻に閉じこもり、自尊心を肥大化させてはだめだということです。この本は、変なプライドを持ってしまいそうになるときの自分を戒めてくれます。
- 8 これからの夢:世界を舞台に働き、日本社会、国際社会のために貢献をすることです。今の自分は全てにおいて力不足なので、これからもずっと勉強していきたいです。



会場内の様子

新  
しい催し

岡崎嘉平太記念館では様々な企画を通じて、嘉平太氏の生涯とその思想、多くの功績を広く様々な世代に向け伝えていきます。近々の予定をお知らせします。ご来場を心よりお待ちしております。



## 岡崎嘉平太記念館所蔵品展 中国戯曲服装図案展

1月25日(土)  
~2月24日(月)



嘉平太氏の遺品「中国戯曲服装図案」(中国・人民美術出版社出版)を中心に工芸品等を紹介します。

中国戯曲とは中国の古典的な演劇のことで、これに用いられる色あざやかな蓮や牡丹、龍や鳳凰等の衣装の図案をご覧ください。



## 第6回 嘉平太が愛したふる里の 子ども作品展

3月1日(土)  
~3月9日(日)

吉備中央町内小学6年生の子どもたちの力のこもった作品が一堂に会します。



写真は過去の会場の様子

## 嘉あちゃんのふる里でふれあい 座談会

3月15日(土)  
午後1時30分~3時30分

会場  
ロマン高原かよう総合会館  
(吉備中央町豊野1-2)

■第一部  
平成25年度吉備中央町  
中学生国際交流 研修団  
研修報告会・・・中学生が  
研修を通じての学びや想い  
を発表します。

吉備中央町の中学生代表  
8人が中国淮安市などを  
訪問し、ホームステイや学校  
訪問など、様々な交流活動  
を経験しました。



■第二部  
座談会・・・活発な意見交換  
により、彼らのさらなる成長に  
向けての応援をしたいと思  
います。

ゲストは、横枕光則さんと、  
井上弘志さんです。中国茶  
のおもてなしつきです。



編集・発行：岡崎嘉平太記念館

〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川4860-6 きびプラザ内

TEL 0866-56-9033 FAX 0866-56-9066

ホームページ <http://www.okazaki-kaheita.jp>

Eメール [okmh@okazaki-kaheita.jp](mailto:okmh@okazaki-kaheita.jp)

2014年1月発行

